

世界で一番美しい夜

2008(平成20)年5月13日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督・脚本・原作=天願大介/絵師・題字=スズキコージ/出演=田口トモロヲ/月船さらら/市川春樹/松岡俊介/美知枝/斎藤歩/江口のりこ/佐野史郎/柄本明/角替和枝/三上寛/石橋凌/若松武史(ファントム・フィルム配給/2007年日本映画/160分)

……天願大介監督が巨匠今村昌平監督の息子であったとは！ またそんな彼に、こんなすごい脚本・原作の才能があったとは！ 他方、名器の持ち主かつ現代に生きるシャーマン、そして全裸でセックスに励むヒロインが、元宝塚スターだったとは……？ そんな驚きを含め、この映画にはビックリが満載！ こんなオリジナルな邦画が次々製作されるようになれば、「邦画復活！」と内外に高らかに宣言できるのだが……。

第3章

傑作・佳作がいっぱい！

はじめて知ったことが2つ！

知ってる人は知ってるだろうが、知らない人は知らないのは仕方なし。この映画の「首謀者」であり、監督・脚本・原作の天願大介が、あの日本映画の巨匠今村昌平の息子であることを私は全然知らなかった。1959年生まれの彼は、1991年の『妹と油揚げ』でデビューし以降大活躍しているらしいが、私は全然知らなかった。

もう1つ、この映画で檜原輝子役を演ずる月船さららは、奇妙な名前の女優だなと思っていたが、プレスシートを読んでからはじめて宝塚出身と知ってビックリ。オールヌード姿の披露はもちろん、激しいセックスシーン(?)にも果敢に挑戦しているからお見逃しなく。

こんな事も知らないようでは映画評論家失格だが、この映画でこの2つのことをはじめて知った、と前向きに考えよう！

オリジナル企画の源泉は……？

天願大介がこの映画を監督・脚本・原作したのは、プロデューサーからオリジナル

脚本で映画をつくってほしいと要望されたため。そこで彼が物語を思いついたきっかけは、プレスシートによれば福島県の発電所で蛇が電線に接触したために停電が起きたという新聞記事を読んだことにあったとのこと。つまり、蛇によって引き起こされた停電は、「蛇による自爆テロ」ではないかと発想したわけだ。

もう1つ天願大介の頭にあったのは、日本の神話『古事記』。神話の世界では性はおおらかなものだったはずだから、そこでテロとエロが結びつき、その後は一気呵成に……？

私は今村昌平監督の『神々の深き欲望』（68年）をちゃんと覚えていないが、プレスシートを読めばそれとの共通点や相違点がいろいろ指摘されている。また、当然天願大介も父親のつくった傑作を頭の片隅に意識していたはずだ。しかし、『神々の深き欲望』を全然知らない世代でも、息子が発想したテロとエロが結びついたメチャ面白い「寓話」は十分理解できるはず。「天願大介ワールドここにあり！」ということをはじめて知った私は大感激！

要村は、出生率日本一！

日本の2005年の期間合計特殊出生率が1.26と落ち込んだことについての評価はいろいろあるが、私はあまり悲観していない。人口が減れば国力が低下するというのはウソ！ もちろん、1億2000万人が1000万人まで減れば話は別だが、8000～7000万人くらいになっても、生産性を高めれば国力の維持は大丈夫。私は何の根拠もなくそう信じている。

それはともかく、この映画の舞台は日本の西の辺境にある要村。そんな要村は、今「出生率日本一」と認定されたため、内閣総理大臣の表彰を受けるべく村をあげて大忙し。なぜ、こんな辺鄙な村が「出生率日本一」に……？

物語は1人の少女ミドリ（市川春樹）のナレーションから始まるが、それを説明するのは複雑で難しいらしい。そこで彼女が語り始めたのは、今から14年前、この村に水野一八（田口トモロヲ）という新聞記者がやってきたことから始まる物語。水野がそんな要村に左遷されてきたのは一体なぜ……？ また、要村が“新聞記者の墓場”とも“監獄”とも呼ばれているのは一体なぜ……？ そして、要村が出生率日本一となったのは一体なぜ……？

新聞記者の墓場とは……？

天願大介の脚本が設定した要村の住人は変人・奇人ばかり。したがって、水野はまず要村支局の支局長遠藤（佐野史郎）と支局員石塚（松岡俊介）の変人・奇人ぶりに驚かされることに。遠藤は「組合活動の闘士」であったため、「新聞記者の墓場」に閉じ込められているが、「意地でも辞めないで闘っていく！」と今なお意気盛ん。しかし、私が観る限り、彼は酒を飲んでクダを巻いているばかりだから、本社復帰の見込みなどまるでなし……？ 支局員の石塚はある取材で大チョンボをやらかした結果の左遷だが、彼も「いつか本社へ復帰を」と願っている様子。2人から「で、お前は どうして飛ばされた？」と聞かれた水野だが、そもそもそんな聞き方はないのでは……？

天願大介演出の面白いところは、映画の冒頭をはじめ、要所所で絵師スズキコージの描いた面白い絵の数々を展示しながら、ミドリのナレーションを流していくこと。水野の口から「実は僕が飛ばされたのは……」と説明しにくいのは当然。そこで、スズキコージの絵とミドリのナレーションによって観客は彼が新聞記者の墓場に飛ばされてきた理由を知り納得。しかし、その話ってホント……？ 何かウラがありそう……？

ちなみに、水野のライバル（？）が鬼塚健児（斎藤歩）だが、彼は副社長の娘との結婚によって、目下出世街道をばく進中！ 本社勤務中の彼はエリート色が少しハナにつくが、同期入社の水野に対しては親友ヅラ。しかし、その腹の中は……？

要村の権力構造は？ 勢力関係は？

遂にロシアではメドベージェフ大統領とプーチン首相による二頭体制がスタートしたが、これは過去に例を見ないもので、いつまで順調に続くのか若干心配……？ 「三権分立」とは権力を1つ（1人）に集中するとヤバいから、立法・行政・司法の三権がバランスをとって牽制し合うという権力構造だが、それはあくまで憲法が存在し民主主義が保証された状態下で成り立つもの。したがって、ミャンマーの軍事政権が今実施している新憲法案の是非を問う国民投票では、そもそも民主主義の体制が存在しないのだから、国民投票自体がナンセンス！

要村はいくら西の外れの小さな村であっても日本国の一部だから、民主主義は保証

されている。しかし、村内の権力構造と勢力争いは、日本のあちこちで見られる地方自治体と同じ……？ まず村長の笠松は、公共事業の誘致によって村を豊かにしようと訴えている典型的な土建族だが、その内心は……？ 次に、田舎村らしく宗教的な権威をカサに着て、右翼チックな復古思想をアピールするのが宮司の平野（若松武史）。そして、「お前が教育をダメにした」の典型のような、ロリコンで古代文明オタクの校長が久保。彼らもまたそれぞれ変人・奇人であることは一目瞭然。

こんな権力構造と勢力関係で要村が成り立っているわけだが、そのいびつな姿を見れば、「平成の大合併」で進められてきた市町村合併をさらに強力に推し進め、道州制の実施を目指さなければならないことがよくわかる……？

最大の注目は、危険人物輝子！

遠藤が毎晩飲みに行くのは、こんな田舎村には似つかわしくない美人ママ輝子（月船さらら）のいる「天女」というスナック。月船さららは元宝塚スターらしいオーラを漂わせているが、一方でどこか悲しげ。こんな女に男はゾッコンになるはずだが、ママにはホントに男はいないの……？

宮司の平野は、そんな輝子を要村の2人の危険人物のうちの1人だと断定した。その第1の理由は、輝子がケッタイなカルト宗教の関係者らしいことだが、さて……？ さらに、村の中には輝子の男関係にまつわる黒い噂も流れていた。水野がそんな輝子に興味を持ったのは当然。そのため、以降水野が新聞記者として輝子を取材していく様子がストーリーの核に据えられることに……。

取材の結果判明したのは、輝子は元精神科医だったこと。そして、婚約者も前夫も心臓麻痺で死亡していること。さらに、それによって輝子は多額の保険金を受領していることだ。こりゃひょっとして、大竹しのぶ主演の『黒い家』（99年）と同じような保険金目当ての殺人事件では……？ 取材を重ねた水野は、遂にある日、店の中で輝子への突撃取材に挑んだが……。

もう1人の危険人物は？

平野宮司が指摘するもう1人の危険人物は、要川に船を浮かべて生活している仁瓶（石橋凌）。宮司の説明によれば、刑務所に入った経験を持つという彼は過激派のテロリストらしい……？ 早速水野はその取材に赴いたが、奇妙なスタイルでの身体の鍛

練と何やらの実験に忙しい彼は取材拒否！

しかし、その後の取材で明らかになったのは、武力革命のバカバカしさを確信した彼が到達したのは、セックスによる現代人の救済という革命理論。そこで彼が今研究に没頭しているのは、精力絶倫だった縄文人のパワーを現代に還元する精力剤「縄文パワー」の開発だ。そして遂に彼はそれに成功したらしい。彼が開発した爆弾は、東京を火の海にする革命のための爆弾ではない。「縄文パワー」の煙を吸った人間は、男も女もすべてセックスに励みたくなるため、東京を一夜だけでも「世界で一番美しい夜」にするという革命のための爆弾なのだ。

これを聞いた水野は、「あんたの頭はおかしい！」と叫んだが、そりゃ当然。しかし、仁瓶は真面目そのものだ。このように見てくると、たしかにこの男は平野宮司が言うように、危険人物であることは明らかだが……。

狂言回し役のメ子にも注目！

この映画が2時間40分と長いのは、登場人物が多く、物語が複雑に絡み合っているため。これまで紹介したストーリーだけでも結構面白そうだと思うはずだが、もう1つの注目点は、狂言回し役の少女メ子（美知枝）。

要村にやって来た水野が最初に出会うこの少女は、イカれた少女として村民からバカにされているが、実はその逆で大天才！メ子が水野に親しみを感じたのは、メ子はバカに近づくと身体がかゆくなる体質なのに、水野の場合はその症状が少ししか出ないため。つまり、水野は多少マシだということだ。

『トンマッコルへようこそ』（05年）はすばらしい韓国映画だったが、物語全体の狂言回し役をつとめたのがカン・ヘジョン演ずるちょっとヘンな顔つきをした村の娘ヨイルだった（『シネマルーム11』141頁参照）。メ子はこのヨイルとよく似た（？）狂言回し役だから、その役割に要注目！

貞操帯を見たことは……？

中世ヨーロッパの時代、十字軍に赴く男たちは留守中、妻に浮気をさせないため貞操帯をつけさせたいが、それって一体どんな構造……？ また、その使い方は……？ 常々そんな疑問を持っている男性諸氏は、元宝塚スター月船さららがつけている貞操帯をじっくり研究することができるからラッキー……？

貞操帯1つの素っ裸で直立する輝子を、股の下から覗き込んで仔細に観察するのは、輝子に対して愛を告白した仁瓶。彼が感心するのは、その貞操帯が継ぎ目なしで作られていること。こんなすごい製品を作り出すことができるのは、あの天才メ子しかない。すぐ近くでその状況を見分していた水野にはそれがすぐに理解できたが、そんな貞操帯を解除することができるのは、それを製作した本人メ子がある場所で、ある男に対して唱えたある呪文。そこで仁瓶がその呪文を唱えたと、あら不思議、見事に貞操帯は破裂したからお立ち会い！すると、その後の展開は……？

こんなバカバカしい話をいかにもまともに見せつけて、観客の良質な(?)笑いをとる天願大介の脚本と演出にほんと感心！

2008(平成20)年5月14日記

ミニコラム

父親超えはどちらが先？

08年9月25日の小泉純一郎元総理の政界引退宣言によって、神奈川11区からの立候補が確実なのが次男の進次郎氏(27歳)。その政治的センスはこれから試されるが、今村昌平監督の息子天願大介監督は『世界で一番美しい夜』で父親譲りの脚本・監督能力を發揮！小泉総理と小泉改革の功績についての客観的評価は10~20年先になるが、06年5月に死亡した今村昌平監督の功績は明白。

シネ・ヌーヴォーは08年10月25日から11月14日まで「今村昌平の世界」全28作を特集上映するが、『にっぽん昆虫記』(63年)、『神々の深き欲望』(68年)、『復讐するは我にあり』(79年)、『黒い雨』(89年)、『うなぎ』(97年)などキネマ旬報第1位作品がズラリ。

また『楢山節考』(83年)と『うなぎ』はカンヌ国際映画祭パルムドール賞を受賞した作品だ。1949年生まれの私は小学生の時に観た『にあんちゃん』(59年)を鮮明に覚えている。しかし中学時代は、日活では吉永小百合・浜田光夫の純愛コンビ作品が多く、『にっぽん昆虫記』『赤い殺意』(64年)、『「エロ事師たち」より人類学入門』(66年)などのエロティックな作品(?)は観ることができなかったから、今回は楽しみ。こんなに多くの名作を残している父親を、同じ映画の世界で超えるのは息子も大変。さて、小泉進次郎と天願大介、どちらが先に父親超えを？

2008(平成20)年10月23日記

第3章

傑作・佳作がいっぱい！